

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025 年 6 月 4 日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・D1
氏 名	津村風帆

1. 派遣国・場所（〇〇国、〇〇地域）
日本、宮崎県串間市 京都大学野生動物研究センター幸島観察所および都井岬
2. 研究課題名（〇〇の調査、および〇〇での実験）
野生動物・行動生態野外実習
3. 派遣期間（本邦出発から帰国まで）
2024 年 5 月 19 日 ～ 2024 年 5 月 25 日 （7 日間）
4. 主な受入機関及び受入研究者（〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュ
京都大学野生動物研究センター 杉浦秀樹准教授、幸島観察所 技術職員 鈴木崇文氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）
写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の渡航では、野生動物・行動生態野外実習として、宮崎県幸島でのフィールド調査体験および、ニホンザルの群れの行動観察と、宮崎県都井岬での御崎馬の行動観察を行った。
[1 日目]
この日のスケジュールは宮崎への移動と実習中の食品の買い出しであった。昼食後は、研究データの記録媒体の講習として、同行の豊田有先生（京都大学野生動物研究センター）よりカメラ撮影技術について教わった。シャッタースピード、F 値、ISO など、カメラ撮影に必要な基本的知識要素からプレゼンテーションのスライド作成等に活かせる画角調整のテクニックまで幅広く教授していただき、大変実りある時間となった。
また、小川あゆみ氏（野生動物研究センター）、前田玉青氏（総合研究大学院大学）から都井岬の野生ウマに関する説明を受けることができた。説明を受けたことで、明日以降の都井岬における観察のポイントがより明確になり、特に個体同士のインタラクションを重点的に観察するという目的を立てることができた。
[2 日目]
都井岬における野生ウマの観察を行った。はじめに小松ヶ丘を主な行動圏とする複数の群れを観察した。途中、他の群れから来た個体（雄雌不明）に対して、群れの雄が対立行動をとる様子や親子間で相互グルーミングを行う様子などの個体間のインタラクションが見られた。
午後からは森へ移動し、観察を続けた。ウマとの遭遇確率は低かったが、馬糞を観察する際に、動物の糞や畑の肥やしなどに自生するマグソダケを発見し、その分散方法について議論することができた。



森林内で遭遇したウマの親子

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

また、森林内で遭遇した親子が落ち葉を採餌しているところに遭遇した。落ち葉も、適当に採餌しているわけではなく、特定の植物種の落ち葉だけを選んで食べている様子であった。野生ウマの食性について、非常に興味が深まった事例であった。

[3日目]

この日は大雨の影響により、観察実習が困難であったため、代わりに宮崎県総合博物館を見学した。宮崎特有の自然や野生生物に関する展示はもちろんのこと、地域の文化に関する展示も興味深いものが多かった。特に、地域で流行したおもちゃを展示したコーナーでは、鑑賞をきっかけに留学生とそれぞれの国での遊び文化についての意見交換に発展した。このこともあり、翌日以降の幸島実習では子ザルが見せる遊び行動について観察しようという目的を得ることができた。

[4日目-5日目]

2日間、幸島に渡りニホンザルの観察実習を行った。実習中の観察テーマを「遊び行動に発展するきっかけとなる個体間のやりとり」に設定し、どのような行動（アイコンタクトや奇襲など）をきっかけとして遊びが開始されるか、またそれぞれのきっかけによって遊びの持続時間に差があるのか分析することを目的に観察を行った。

観察は、フィールド内のコドモ期のサル同士が接近した場合に録画を開始し、遊び開始のきっかけから遊びが終わるまでを記録する event-sampling 方式で行った。結果、2日間で計 26 回の遊び行動が観察された。

また、テーマとした遊び行動とは別に、オトナ期の個体に比べて幼い個体ほど周りに落ちている木の枝や人工物を手に取る様子が観察された。その行動が、学習期を象徴するような行動である印象を受け、非常に興味深かった。



コドモ期のサルの遊び行動

[6日目]

この日は、幸島での観察結果をデータとしてまとめ、発表した。

遊び行動を開始する前のインタラクションとして＜対面＞や＜アイコンタクト＞をきっかけとした場合、片方が他方に＜奇襲＞により遊びをしかけた場合に比べて、遊びの成功率が増加し、より長い時間遊びが持続するという結論が得られた。先行研究を参考にしながら、実習に同行していただいている先生方や実習生からも助力をもらい、まとめることができた。

[7日目]

各自部屋や利用した用具の片づけを行い、帰路についた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

[所感]

今回の実習では野生動物を観察することの醍醐味を感じることができた。私の場合、普段目にする動物の多くは、動物園等で飼育される個体である。当たり前かもしれないが、今回の実習で出会った野生個体たちの見せる行動は、例えば個体間の関わり合い一つとっても、様々な個体同士のグルーミングから威嚇行動まで、その頻度と多様性に富んでいた。その差は、群れの規模が飼育下よりも野生下の方が大きいことに起因する可能性もあるかもしれない。しかし、あくまで個人の主観的な印象に基づく意見であるが、やはり自然下という環境の影響も大きいように思われた。今回はそのような野生下における行動を間近で観察することで感動を得たとともに、飼育下の動物に対してより多様な行動の発現を促すための研究の重要性を改めて感じることもできた。

私にとって野生動物の行動をデータとしてまとめた初めての経験であった。引率していただいた方々からのご指導も含め、今回の実習が非常に学びのあるものであったことは言うまでもない。

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

引率してくださった杉浦先生、幸島でのサルの観察をはじめとし様々な場面でサポートしてくださった鈴木氏、ウマの観察をサポートしてくださった前田氏、幸島観察所での生活をサポートしてくださった皆様に深く感謝申し上げます。